



# 若冲 World

## 1 旭日鳳凰図

伊藤若冲

一幅

絹本着色 宝暦五年（一七五五）  
本紙一八六・〇×一四・二

瑞鳥である鳳凰は、中国においてはもちろん、わが国においても古くから表されてきた。しかし、若冲の鳳凰ほど印象的な鳳凰はいない。多くの画師が手掛けてきた鳳凰の描写と若冲の鳳凰は何が異なるのか。それは、特に鳳の優美なポーズとまめかしくも気品ある顔の表情、羽の繊細な表現と色彩構成、これら全てに神経が行き届いて生命感が吹き込まれたかのような描写で、ただ真似て美しく描いただけに留まらないからである。白、茶、緑色の羽には細かな文様が描かれ、持ち上げた尾羽（上尾筒）は先端の赤いハート形を振り広げる。本図は、款記に自ら記すように、明画の原本の鳳凰を手本として描いたものであろうが、その関連性の考えられる作品（No.26）の鳳凰にさえ、これほどの存在感はない。描写する鳥や花などの図様の一つには、手本となる形があったのであろうが、それは若冲自身の中で新たな図様に変わっている。しかし、奇抜さを狙って変容させた作画的なものではない。若冲の中で元となる図様が消化され、自然にスパイスが加わって若冲の味となる。その感性に優れていたと言える。鳳凰は、さらに「動植綵絵」の中でも描かれるが、本図よりもさらに変容し、白羽の美しさが際立ち、尾羽先のハート形がより印象に残る。

本図もまた、「動植綵絵」修理中の平成十五年度に修理を行なった。「動植綵絵」制作以前の大作であり、その描写方法の確認が興味深い課題となったが、やはり「動植綵絵」と同様、鳳凰の描写を中心に裏彩色の技法を細かく用い、背景には薄墨を施していた。それ以前の若冲の着色画と比較して、図様や色彩が密になったこの作品の制作頃までに、若冲は絹絵への表現描写の方法を、それまでに様々な方法で会得してきた伝統的な方法をもとに、自分のイメージする描写を表現するために体得していたのである。本図や「動植綵絵」に見られる描写の強い主張は、若冲自身の表現への自信の表れであるかもしれない。

ない描写なのである。

そして、それらの描写には、自然の持つみずみずしく美しい色彩を表すための若冲の工夫が重ねられていることが、今回の修理でより明確となった。彼が用いた絵具は、既存の顔料や染料を基本としながら、その混色や重ねによって、一体、何色の色が生み出されたのかと考えさせられる程、バリエーションに富んでいる。また、絹に描くことの特質を活かし、絵の裏面に彩色を施して、画絹の織目の間から感じられるその色を表面に活かして表現する、裏彩色という描写技法も多用している。また、画の背景を薄墨や藍などを薄く施してやや暗くし、描写する花などの美しい色を際立たせている。さらに、薄く施した絵具で描写の透明感を高めたのに加え、画絹の裏に打つ肌裏紙の色調を墨色として加え、これらの工夫が重なることで、それぞれにはボリューム感が加味され、画全体に奥行き感が生まれている。

しかし、これらの技法は、決して若冲独自のものではない。裏彩色は、日本画の伝統的な技法であり、中国画にもある。背景に薄墨を施すこと等は中国画、長崎派の画師らも行なっている。顔料と染料を併用して様々な色を工夫していることも、古い作品に見られる。

ただ、若冲は、他の画師よりも、花鳥を描くことの目的が純粹で、画絹に描くことの特質を熟慮し、描法を自分なりにアレンジして、表現にこだわり続けた。生き物の生命を尊び、描くもの総てに同じ想いで接したことが、他の人には真似の出来ない独自の世界観を創り上げたのだと思う。

江戸時代中期、十八世紀、京で活躍した画師・伊藤若冲を語るのに、「動植綵絵」三十幅はなくてはならない。彼の本業である青物問屋「枳屋」の主人という立場を捨ててまで専念したかった画業の道に入って間もなく、描きたいという、ただ一心で、十年近くの歳月をかけて完成させた大作である。そして、この大作は、相国寺に納めた釈迦三尊像を莊嚴するために、何の損得も関係なく描かれ寄進された。描きたいという意欲、それもただ純粹に、生き物の美しい生命を描き表したいという想いに溢れたこれらの画に、多くの人が魅了され続けている。

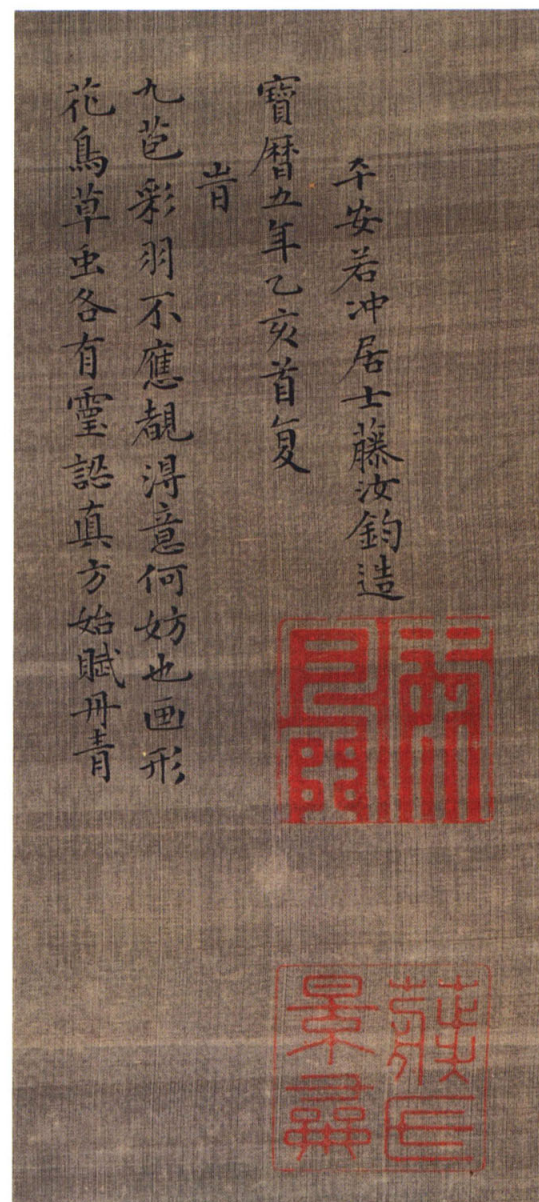
若冲のこうした姿勢は、「動植綵絵」に取りかかる以前に既に窺え、宝暦五年に描かれた「旭日鳳凰図」の款記に「花鳥草虫各有靈。認真方始賦丹青。」（花鳥草虫にはそれぞれに靈がある。その真を認識して描き始めるべきである。…）と記される。彼は、花鳥草虫等、自然界に生を受けて生きる物たちの様々な動き、自然の中に見られる多くの美しい色彩を、如何に表現するかということを常日頃から考え、工夫したのである。彼はとにかく自然界に生を受けたものを尊んだ。その生命あるものが持つ表情や色彩のみずみずしさを、日々、自然と向き合う中で見つめ、観察し続けることで捉え、表現したのである。

彼自身によって「動植綵絵」と称された三十幅の大作は、単なる花鳥画ではない。釈迦三尊像のもとにあらゆる生き物が集い、その教えを聞く、という深い意味がある。それ故、この絵の中に描かれた総てのものが、皆、その存在を主張し、隅々に描かれたものまでが決して添え物ではなく、欠けてはなら





部分



款記·印



部分



印

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花鳥―愛でる心、彩る技（若冲を中心に）

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 40

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年三月二十五日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections